

江戸より京までの間に大橋四あり、武藏の六郷、三河の吉田、矢矧、近江の勢多なり、
〔垂加草〕^四遠遊紀行

六郷橋

橋下水漾々、橋上人儻々、橋邊回首見、郷關雲路遶、

〔十三朝紀聞〕^三靈元、寛文十一年八月二十九日、東海大水、流六郷川橋九十餘間、

〔貞享二年東路記〕河崎の川に大橋あり、北を六郷といふ、南は川崎なり、

〔一話一言〕^{十六}六郷橋

貞享元年甲子、六郷橋破損、御修復、

長百拾壹間

但兩袖高欄

横四間貳尺

同三寅年、六郷大橋、當六月四日、同十二日、兩度之出水ニ付、川崎方橋臺欠込、石垣かづら石共崩落、
敷板所々朽損、

〔貞享四年東山牧魯記〕六郷の橋はこちたく曲みて、危ぶみながら渡る、

〔武江年表〕^三此年間享○貞記事

貞享中洪水あり、六郷橋流る、夫より掛る事なしといへり、

〔千種日記〕六郷の橋を過る、此河は武藏の多摩川なり、源は秩父の山より出て、稻毛の庄の東を經て、此所に流來て海に入る、

〔身延行記〕六郷の橋の下にて、馬に水飼はせけるに、母の御輿來れり、

〔用捨箱〕^上六郷酒勺之士橋

六郷の橋絶て後、土橋のかゝりし事のあり、^{○中}春秋落水はげしきときは、妨となるが故、橋ある略